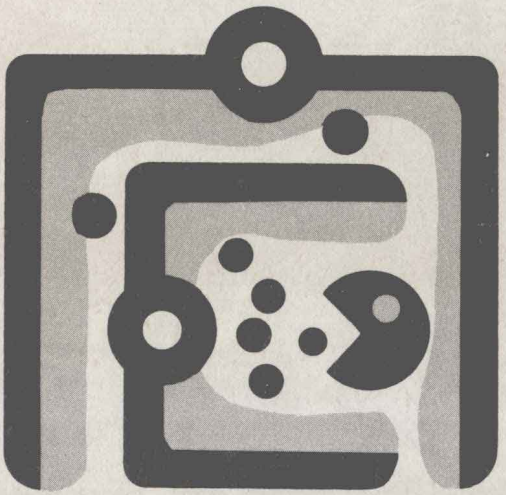
ISSN 1345-6156

ことばの科学

STUDIA LINGUISTICA

第14号



名古屋大学言語文化部
言語文化研究会
2001年12月

ことばの科学

STUDIA LINGUISTICA

第14号

2001年12月20日　印刷

2001年12月25日　発行

編集兼　名古屋大学言語文化部

発行者　言語文化研究会

印　刷　名古屋大学生協　印刷部

ISSN 1345-6156

はしがき

『ことばの科学』第14号をお届けする。

今回掲載した論文は教官によるもの３篇、教官と教官の共著が１篇、教官と大学院生の共著が１篇、それ以外は大学院生もしくは修了者によるものである。大学院生の投稿が相変わらず多いということは非常に好ましいことである。大学院生が『ことばの科学』を踏み台にして研究者へと育ってくれるならば、それは無上の喜びである。

今回は編集者が特に多忙であったために、12月中に発行できるかどうか危ぶまれた。しかし、何とか例年通り12月に発行できた。

帝州大学図書館
藏書

2001年12月
(小坂　記)

名古屋大学言語文化部
言語文化研究会

平井勝利　　近藤健二
小坂光一　　飯田秀敏
成田克史　　木下　徹

執筆者一覧（掲載順）

伴 映 恵 子	文学研究科日本言語文化専攻修了（在フランス）
杉 村 泰	言語文化部教官
李 善 雅	国際言語文化研究科日本言語文化専攻大学院生
名 嶋 義 直	国際言語文化研究科日本言語文化専攻大学院生
勝 川 裕 子	国際言語文化研究科国際多元文化専攻大学院生
武田みゆき	国際言語文化研究科国際多元文化専攻大学院生
平 井 勝 利	言語文化部・国際言語文化研究科日本言語文化専攻教官
松 浦 暢 子	国際言語文化研究科国際多元文化専攻大学院生
梅 森 佳 子	国際開発研究科国際コミュニケーション専攻修了
小 坂 光 一	言語文化部・国際言語文化研究科日本言語文化専攻教官
木 下 徹	言語文化部・国際開発研究科国際コミュニケーション専攻教官
酒 井 智 宏	国際開発研究科教官（助手）
馬 場 典 子	国際言語文化研究科日本言語文化専攻大学院生
今井田亜弓	国際言語文化研究科国際多元文化専攻大学院生
朴 序 敬	国際開発研究科国際コミュニケーション専攻大学院生
安 斉 真 生	国際言語文化研究科日本言語文化専攻大学院生
田所真生子	国際開発研究科教官（助手）
大 石 晴 美	国際開発研究科国際コミュニケーション専攻大学院生

『ことばの科学』執筆要項及び第1号～第14号の内容（目次）
に関しては次のURLをご覧ください。
http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~kosakak/gengo.html

目　次

伴　映　恵　子　時制交替と述語
——「テイル／テイタ」と「ル／タ」—— ----------5

杉　村　　泰　推論の型と推論の根拠の関連について
——ニチガイナイとヨウダ、ラシイの違い—— ----------23

李　　善　雅　議論の場に見られる「ね」「よ」「よね」について
—日本語母語話者と韓国人学習者との相違— ----------41

名　嶋　義　直　ノダ文の提示するもの——「解釈」という観点から ----------71

勝　川　裕　子　“得”補語文に受事“N2”が表れる表現
——補語とその叙述対象—— ----------93

武　田　み　ゆ　き　中国語にみる共感覚比喩についての一考察
——擬音語の擬態語化をめぐって—— ----------107

平　井　勝　利
松　浦　暢　子　軽声音節試論 ----------119

Yoshiko UMEMORI　Quantifier Interaction in GB and Minimalism (II) ----------133

小　坂　光　一　「成立」と「存在」(3)
——「タ形」と「テイル形」—— ----------163

Toru Kinoshita
Tomohiro Sakai　Intralinguistic (Genre) transferability and prototypicality of meaning of polysemous words: the case of BREAK ----------185

馬　場　典　子　程度の高い怒りを表す動詞（句）の意味分析
—ゲキドスル，ギャクジョウスル，キレル，カンシャクヲオコス— ----------215

今　井　田　亜　弓　文理解における“cue” ----------231

朴　　序　敬　疑問文における「は」と「が」及び「nun」と「ga」
—「우체국이 어디입니까?」「郵便局がどこですか？」をめぐって— -----255

安　斉　真　生　「って」の機能について
～ある名詞句の属性を捉え直す用法に注目して～ ----------285

田　所　真　生　子　外国語学習における学習者の情意要因に関する考察 ---------303

大　石　晴　美　インプットからインテイクへの言語情報処理過程
——言語の脳科学的視点より英語教育への応用—— ----------321

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

時制交替と述語
—「テイル／テイタ」と「ル／タ」—

伴　映恵子

1. 問題提起

日本語の時制交替というテーマを扱うとき、時おり問題となるのが、交替を起こす述語の種類である。大別してそれは、形容詞や繋辞の「ダ」または「テイル」形の動詞を伴う静的述語か、あるいは一般的な動詞の「ル」形を伴う動的述語か、ということであるが、少なくとも語りの文を扱っている先行研究では、静的述語の方がより時制交替を起こし易い、という点が指摘されてきた（牧野(1983)、曽我(1984)、池上(1986)等）。一方会話文については、どちらがより交替を起こし易いということはない、という考察もある（松村(1997)）が、全体にあまり問題化されていないのが実情である。

ところで、この点に関連して、先行研究において決定的に欠如していると思われる点がある。それは、動詞述語に限定した交替の種類すなわち「テイタ／テイル」と「タ／ル」の交替が表わす相違についての議論である。もちろんこれは、従来指摘されてきた、静的述語と動的述語という問題に含まれ得るものではある。しかし、静的か動的かという従来の議論は、動詞のみについて言えばあまりにも漠然としているように思われる。次の例を見られたい。

（1） 子供が大声で泣いている／泣いていたんです。
（2） 子供が大声で泣く／泣いたんです。

（1）と（2）の間にアスペクト的相違があることは明らかであるが、他に、それぞれの時制の対立の仕方などにも、決定的な違いがあるように思われる。つまり、（1）では、「テイル／テイタ」が、時制上、現在／過去という対立を引き起こしているが、（2）では、「ル／タ」が、必ずしも現在／過去という対立

を引き起こしているとは言えないからである。日本語の基本形が原則的に現在を表す訳ではないという事実を鑑みれば、これは当然のことであるが、時制交替に関する先行研究では、これらの違いに注目することなく、これらを時制交替の現象として一括して取り扱ってきたのである。本稿では、これらの相違を明らかにすることによって、これまでの研究で曖昧にされていた部分を解明する手がかりを見出したいと思う。

2.　会話における時制交替と述語との関係

2.1.　二つの時制交替のパターンに共通する効果

「テイル／テイタ」の交替と「ル／タ」の交替は、それぞれどんな効果を伴うものなのだろうか。例を見ながら考えてみたい。まず、本項では、ふたつの交替に共通する効果を考えてみる。まず、「テイタ／テイル」の例を見られたい。

（3）　「とんでもない。…あの強い雨がジャンジャン顔をたたいているんですもの。…楽しいなんてことじゃなかったわ」（『あいつと私』）

（4）　「届いたか何か知らないが、全然おかまいなしですよ。聞こえやしません。相変わらずものすごい顔つきでね、こう、踊ってるんです。ありゃ本物です。狐つきだ。芝居なんぞじゃねえですよ。まるっきり無我の境地なんだから」（『御手洗潔の挨拶』）

（5）　「キッス・シーンが良いわ。素敵よ。それからベッド・シーンが凄いの。まるで裸よ。わたし、頭痛くなっちゃった。渡辺さんとふたり並んで見ていたらね、渡辺さん慄えているの。ほんとに、ぶるぶる慄えてるの。純情ね。呆れたわ」（『青春の蹉跌』）

（6）　「上原静子の名であそこに入った彼女はなにしろ素人ですからね。様子を知ろうとしてきょろきょろしているんです。あれじゃ向う側にすぐ察知される。そこで、ぼくは（…）。」（『彩り河』）

次は、「タ／ル」の交替例である。

（7）「私にね、私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになるんですもの。」（『山の音』）

（8）「そうじゃない？お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がるのよ。わたしだってさびしいわ。」（『山の音』）

（9）「私の腕を掴んだまま転ぶんですもの。重かったでしょう？」（『愛しい女』）

（10）「（…）ところが、あの人、食べようとして、あわてて口を抑えるのよ。どうしたのかと思ったら、急に吐き気がしたんだって。」（『愛しい女』）

（11）「二度目は、わたしが働きに行っている等々力の家にまであの男は電話をかけてきて、近所へ呼び出すんですからね（…）」（『彩り河』）

（3）～（6）が「テイル」による交替を、（7）～（11）が「ル」による交替を表しているが、いずれにも共通している点は、まず、時間的視点の移動である。いずれも、「タ」の欠如によって、発話時に立って過去の出来事を語るという通常の視点が失われている。

次に、この視点の移動に関連することであるが、交替を伴う文の内容が、新情報としてではなく、各主題の一環を示すものとして提出されているのではないかということである（伴（2000）p.27 参照）。逆に言えば、以下の例に見られるように、話し手の情報提供の態度を表す場合には、「タ」形が必然的となり、時制交替は不可能である。

（12）「いったいどうしたというんでしょう。」（…）
「子どもをおろした（＊おろす）んだよ。」（『山の音』）

（13）「どうしてまた話がぶりかえしたんだ」晋也が訊いた。
「女が出来たのだったら慰謝料を取るといいだした（＊いいだす）の」（『渇く』）

（14）「そりゃ、安田さんが駅に向うタクシーの中で、何度も腕時計をながめるんですもの（…）」（…）
「なに、安田さんは、何度も腕時計を眺めていた（＊眺めている）って？」（『点と線』）

聞き手への情報提供の態度を表す際、「（テイ）ル」形を用いることは不可能であることがこれらの例文から察せられる。(14) では、時制交替の起こっている話し手の発話（すなわち、話し手が情報提供を意図しないで行った発話）を、聞き手が自分自身に対する情報として言い換えているが、この場合もやはり、時制交替は不可能となる。

したがって、（3）から（11）の時制交替に共通するもうひとつの点は、話し手における情報提供の態度の欠如であると考えることができる。

2.2.　「テイル」形の時制交替

「テイル」形の時制交替には必然性があるのだろうか。まず、文脈及び文法上「タ」形が用いられない場合がもちろんある。

(15)　「（…）すると、お時さんはその男の人の隣の座席にすわって、たのしそうに話している（＊話していた）じゃありませんか。まあ、あきれたもんだと思いました」「その場合、君たちはお時さんと話をしなかったのかね？」「せっかく、両人でこっそり楽しい旅行に出かけている（＊出かけていた）ところですもの。邪魔しては悪いと思ったからそのまま黙って帰りました（…）」（『点と線』）

この文脈においては、「ジャアリマセンカ」「トコロデス（ダ）」ともに、文法上「ル」形を取らざるを得ない。「タ」形を取った場合、前者では、聞き手に事実を認めさせる意味を持つことになるため、これまでの例とは反対に、ふたりが情報を共有していなければ不可能である。後者については、「タ」を取ると、その動詞の表す時が出来事の時間より先行してしまうため、旅行出発時というこの文脈のなかでは不適格となる。

さらに、前項で示したように、時制交替が情報提供の欠如を生み出すとすれば、次のような場合は、時制交替が必然的となる。

(16)　「会社から帰って、着替える時、おじゅばんもきものも、自分で左前に合わせておいて、帯を巻きかけて、おかしな工合いだというふうに

立っている（＊立っていた）んだから。（…）」（『山の音』）

(17)　「家の灯が消えている（＊消えていた）んだもの。ぎょっとしたわ…子供たちが二人ともいなくなったのかと思って」「電話かけてきたんだよ事務所へ、心細い声で」（『渇く』）

(18)　「吉岡さんって、ヘンな人ねぇ。」
「どうしてです。」
「みんなとつき合わないで、洗面所でひとりごと、言ってる（＊言ってた）んですもの。」（『わたしが・棄てた・女』）

これらの例のように、聞き手が完全に話し手と話題を共有していて、情報提供の話し手が情報提供の態度を示していない場合は、「タ」形は却って不適格となる。例えば（17）における「吉岡さん」とは聞き手自身を指しており、話し手はもちろん、聞き手自身の行為に対して情報を提供するために話しているわけではない。したがって、「タ」形は不可である。

では、前項で挙げた例のような場合はどうか。

（3）’あの強い雨がジャンジャン顔をたたいていたんですもの。
（4）’相変わらずものすごい顔つきでね、こう、踊ってたんです。
（5）’渡辺さん慄えていたの。ほんとに、ぶるぶる慄えてたの。
（6）’様子を知ろうとしてきょろきょろしていたんです。

「テイル」も「テイタ」も、動作またはその結果を、「時間的限界を無視して継続的にとらえ」（奥田, 1977）ているという点では共通しており、両者を区別するものは、基本的に現在か過去かというテンス的対立にすぎない。すなわち、「シテイル」は現在の、「シテイタ」は過去の、それぞれ継続性を示している。よって、過去の出来事に対して時制交替が起こる場合も、基本的には、視点の移動、そして情報提供の態度の欠如以外の変化は生じないと思われる。したがって、上に示したように、「テイル」を「テイタ」に置き換えても、それほどの違和感は起こらない。次の例も同様である。

(19)　「いやはや、アテがはずれましたよ。僕が行ったときには、ちゃんと彼女はベッドの上に坐っている（坐っていた）のです。おまけにね、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

傍のテーブルの上に、コーヒー茶碗が二つ置いてあって、ゆらゆらと湯気が立ちのぼっている（立ちのぼっていた）のです。（…）」（『漂う部屋』）

(20)　「夢ですよ。僕も二度ばかり見ましたよ。一度はアメリカにいるとき、胸をやんでどうしようか、と思っている頃に、枕元でおふくろが観音さまを拝んでいる（拝んでいた）んです。（…）」（『抱擁家族』）

2.3.　「ル」形の時制交替

次に、「ル」形の場合はどうか。「ル」形についても、文脈上または（及び）文法上、交替が必然的な場合がある点では「テイル」形と同様である。次の例を見られたい。

(21)　「だって散歩から一人で戻ってきたら…事務所の奥で変な嗄れ声がする（＊嗄れ声がした）でしょ。（…）」（『わたしが・棄てた・女』）

(22)　「この前行った時も、私がさんざん言ってやったのを、子供が立聞きしてたんですね。隣りの部屋で不意にすすり泣きが聞える（＊聞えた）じゃありませんか。」（『千羽鶴』）

しかし「ル」形の場合、「タ」形との対立が「テイル」形と「テイタ」形とのそれとは異なり、単に時間の問題や情報の提供有無の問題だけでは済まない場合が多く出てくる。

例文（7）～（11）を「タ」形で表してみよう。

（7）’「私にね、私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになったんですもの。」

（8）’「そうじゃない？お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がったのよ。わたしだってさびしいわ。」

（9）’「私の腕を掴んだまま転んだんですもの。重かったでしょう？」

(10)’「（…）ところが、あの人、食べようとして、あわてて口を抑えたのよ。どうしたのかと思ったら、急に吐き気がしたんだって。」

(11)’「二度目は、わたしが働きに行っている等々力の家にまであの男は電

話をかけてきて、呼び出したんですからね（…）」

「タ」形による交替は可能ではあるが、「ル」形で表された場合とは、明らかに異なる意味をもたらしているように思われる。

ところで、動作またはその結果を「時間的限界を無視して継続的にとらえ」ている「テイル」や「テイタ」に対立して、「ル」と「タ」は、動作を「継続性を無視して時間的に限界づけてとらえ」（奥田1977）ているという点で一致しており、基本的に、「テイル」と「テイタ」が、現在・過去という時制的対立を起こしているのに対し、「ル」と「タ」は、このような対立を持たない。それは、前述したように、このようにアスペクト的に継続性を持たない「ル」が、一般の動詞において「現在」を表さないからである。したがって、「ル」と「タ」の対立は、現在・過去のそれではなく、ポテンシャルかアクチュアルかという対立になる。

このように見てみると、時制交替の効果は、「テイル」による時制交替のそれとは別のものであるというふうに考えられるのではないだろうか。つまり、「ル」形で表された行為に対しては、時間とは切り離された行為そのものに視点が置かれ、「タ」形で表された行為に対しては、既に完了したものとしての行為に視点が置かれているということである。

（7）　私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになるんですもの。<抽象概念としての行為に視点>

（7）’　私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになったんですもの。<完了的行為に視点>

（8）　「そうじゃない？お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がるのよ。わたしだってさびしいわ。」<抽象概念としての行為に視点>

（8）’　「そうじゃない？お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がったのよ。わたしだってさびしいわ。」<完了的行為に視点>

このように、時に制限を持つ行為に視点が当てられる場合と、抽象概念としての行為に視点が当てられる場合とでは、そこに付加されるモダリティのあり方にも当然違いが生じると考えられる。その点を次項で考察する。

2.4. モダリティと「ル」形

伴（2000）でも述べたように、会話における時制交替では、「ン」に代表されるモダリティ表現との共起が一般的であり、それがないと文としての安定性を失うことが多い。そして、その傾向は「テイル」形よりもむしろ「ル」形に強いように思われる。「テイル」形の場合、数は少ないが、モダリティ表現が発話の特殊な調子に取って代わられる場合もある。

(23)　「（…）このあいだ僕がひょいと応接間へはいって行ったら君、妹を裸にしてソファの上に寝かせてさ、それをモデルにして描いていやがる！」（『幸福の限界』）

(24)　「（…）僕はそんなに不信用なんですかと聞くと、ええと云って笑っている。厭になっちまった。（…）」（『三四郎』）

(25)　「（…）Sは僕の方を見ても知らん顔をしている。（…）」（『友田と松永の話』）

一方、「ル」形については、モダリティ表現を伴わない使用は極めて坐りが悪いようである。

（7）”？私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになる。

（8）”？お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がる。

これはまさに、ある定まった時間的枠組みの中で行われたはずの動作が、単なる概念としてそのまま差し出されるために起こる坐りの悪さなのではないだろうか。したがって、次のように、これが＜反復性＞として使用される場合には、モダリティ表現がなくても不自然ではない。

(26)　「ところが、替えたばかりの電話に掛けて来る、おかしいと思ったら、ご丁寧に電話局のほうで、前の番号から新しい番号にお掛け直し下さいとテープを流していた。」（『あした天気にしておくれ』）

(27)　「（…）あのあたりは、なんとかせんべいって言って、大きいの。それを三枚も四枚も蒲団の中に引き入れて、ぽりっぽりっと食べる。（…）」（『浄徳寺ツアー』）

それでは、モダリティと「ル」形は、どのように作用し合っているのであろうか。この点を考える前に、まず、ともに時制交替のかたちである「ル」形と「テイル」形との違いについて考えてみたい。

まず、「ル」形が動作の＜完成性＞を表し、「テイル」形が動作またはその結果の＜継続性＞を表すというアスペクト的相違がある以上、次のような瞬間性の動詞は、文法的に交換不可能である。

（9）　私の腕を掴んだまま転ぶ（＊転んでいる）んですもの。

（11）　二度目は、わたしが働きに行っている等々力の家にまであの男は電話をかけてきて、近所へ呼び出す（＊呼び出している）んですからね。

だが、継続動詞の場合は、次のように、交換を行っても文法的支障は必ずしも生じない。

（7）　私にね、私にさわると悪いように、離れるように反って、お踊りになる（お踊りになっている）んですもの。

（8）　お父さまだまりこくって、まずそうに召し上がるの（召し上がってる）のよ。

では、この場合の「ル」と「テイル」のアスペクト的相違は、何を反映しているのであろうか。以下の例で考えてみたい。

（28）　昨夜は大変でした。うちの赤ん坊が一晩中 | 泣く / ＊泣いている | んです。

この例において、「テイル」形が適切でないのはなぜか。筆者によれば、これは、発話状況における話し手の動作主または動作自体に対する心理的距離によるのではないかと考えられる。つまり、心理的距離が近いと考えられる場合は、「ル」形の方が適切となる。なぜならそのような場合、話し手の関心は、動作の継続や完了といったアスペクトの問題にではなく、動作の概念そのものに集中しているからである。「テイル」形が用いられ、話し手の視点が＜継続性＞というアスペクトに置かれる場合、話し手の動作主に対する心理的距離感はずっと長く

なるようである。例えば次のような文では、「テイル」形の方が「ル」形よりむしろ適切であるといえる。

(29)　隣りのうちの赤ん坊が一晩中　泣いている　んです。
　　？泣く

次の例でも同じことが言える。

(30)　父が食事がまずいと言って、母に　怒っている　のです。
　　怒る

(31)　父が、食事がまずいと言って、私に　怒る　のです。
　　＊怒っている

例（29）のように、動作主（この場合は「父」）の動作の対象（この場合は「母」）が話し手でない場合は、その話し手の動作主または動作の対象に対する心理的距離の違いによって、「テイル」「ル」ともに可能であるが、例（31）のように、動作の対象が話し手自身である場合、「テイル」は適切ではない。それは、先ほどから述べるように、「テイル」が、この状況に求められる話し手の動作主に対する心理的距離を示さないからであろう。次のような例では、話し手の心理的距離が大きく作用している。

(32)　「血のめぐりの悪いくせに（a）怒ってん（怒る）のよ。このあいだお座敷に来て、いやと言うほど（b）つねる（＊つねってる）のよ」（『点と線』）

（a）の動作（怒り）の対象は話し手自身であるのだから、「ル」でも可能なはずであるが、ここでは「テイル」を取ることによって、話し手（芸者）の動作主（客）に対する心理的距離の長さ、すなわち無関心の表われを示しているものと思われる。一方、（b）は、「テイル」を取り得ない。動作の対象が話し手自身であり、心理的距離が狭まるからである。

このように、同じ時制交替でも、「ル」形と「テイル」形では、心理的な作用の仕方が異なっている。そして、「ル」形が絶対的にモダリティ表現を必要とするのは、まさにそのことに因るのではないかと思われる。概念としての動作を提示

することが話し手の動作（主）に対する心理的距離の表われにつながるとすれば、モダリティ表現は必然的と言わざるを得ないであろう。そしてそれが、具体的には、憤慨・失望といった感情の提示を導くのである。それでは、基本的にモダリティ表現を伴わない語りの文のなかでは、どのような相違が起こるのであろうか。それを次項から見ていきたい。

3. 語りにおけるふたつの時制交替

本論の冒頭で触れたように、語りにおいては、動的述語より静的述語の方が時制交替を起こし易いということが既に指摘されてきている（牧野(1983)、曽我(1984)、池上(1986)等)。ここで問題にしている動詞に限って言えば、動的述語とはすなわち、静態動詞などを除く大部分の動詞の「ル」形を指し、静的述語とは、動詞の「テイル」形や静態動詞などの「テイル」形を指していると考えられる。一方、会話においては、特に静的述語の方が交替を起こし易いということはない。この相違が、前項までに述べてきたような、「ル／タ」「テイル／テイタ」の本質的な違いに因るものなのか、会話と語りという文体上の違いに因るものなのか、あるいはその両者に関連しているのか、ここでは考えてみたい。

3.1. 語りにおける視点と交替

実際、語りのなかでは、動作性の「ル」形が、時制交替を起こしにくいのは確かのようである。沢崎（1983）は、『愛の渇き』（三島由紀夫）の一節の文末をいろいろ書き換えた末、以下の（例文（33)'）書き換えが最も不自然であるとする。

(33)　悦子は各駅停車の宝塚行に乗って座席に掛けた。窓外はとめどもない雨である。前に立ってゐる乗客がひろげてゐる夕刊新聞の印刷インクの匂ひが彼女を物思ひからよびさました。うしろぐらい人のやうな動作で、彼女は自分のまはりを見まはした。何事もない。（三島由紀夫『愛の渇き』)

(33)' 悦子は各駅停車の宝塚行に乗って座席に掛ける。窓外はとめどもない

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com